

“高大連携”活発に —

都立狛江高の留学生に日本語マンツーマン指導

文・高田麻由さんと高朝順さん

「教えられる」喜びも

文学部日本語日本文学科日本語学専攻の高田麻由さんと高朝順さん(いずれも4年次)が、高大連携協定高の東京都立狛江高校(木嶋智恵校長)の留学生に、日本語を個人指導中だ。二人は「教える中から、教えられることがたくさんある」と意欲的に取り組んでいる。

豪州からの留学生クレイグ・ジョンズくん(シドニー市チャッツウッド高2年)に、ボランティアで日本語を教えてほしいという同高からの申し入れを、備前徹ゼミで日本語教授法を学ぶ二人が受けた。5月から高田さんが文法や会話を毎週4時間、高さんは漢字や会話を週1時間、マンツーマンで指導している。



▲クレイグくん(左端)に日本語を指導する高田さん(右隣)と高さん(右端)。中央は昨年、同高留学生に日本語指導した余田真梨さん(文4)

「日本語は独学で学んできた」というクレイグくんは、PIEE(国際教育交流協会)の留学プログラムで3月に来日。10カ月間の滞在予定で同高生徒と机を並べて学んでいる。簡単な日常会話は話せるが、「授業での日本語は難しく、ほとんど理解できない。でも二人の先生(高田さん、高さん)に、分からない言葉や表現を聞くことができる。レッスンも楽しい」と笑顔を見せている。

高田さんは、クレイグくんとの4回目のレッスンで「何かいいことないかな」などの助詞「かな」の使い方を問われた。

「私たちが当たり前のように使っている表現を分かりやすく説明するのは難しい。的確に答えられない時、ゼミに持ち帰って先生やゼミ生に投げかけ、長い討論になることもあるんです」教える難しさと共にやりがいを感じているところだ。情報サービス会社への就職が決まり、このほかの日本語ボランティア活動にも熱心。卒業後も日本語を教え続けたいそうだ。

その高田さんが「日本人よりきちんとした日本語を話す」と評価する高さんは、来日4年の韓国人留学生。高校から日本語を学び、プロの日本語教師になりたいと本学に入学。今春、米オレゴン大学での日本語教育実習プログラムにも参加し実践力を磨いた。大学院進学を目指している。

「クレイグくんは学習意欲が高く、日本語の単語や表現をあらかじめ調べてきて質問します。自ら覚えようとする姿勢には、むしろ私の方が教えられています」

二人の個人指導は年内いっぱい行われる予定。

都立狛江高・3年生生田キャンパス訪問

狛江高校の3年生(315人)が生田キャンパスを3回にわたって訪れ、講義を受講。参加高校生は大学生気分を体験した。

6月20日には80人が訪問。本学紹介ビデオを觀賞後、経営学部の山田耕嗣准教授の「映画ビジネスとプロデューサーの仕事」を聴いた。山田准教授は、商業映画のヒットに大きな力を持つプロデューサーの存在と功績を紹介。『千と千尋の神隠し』などで世界的人気を博している「宮崎アニメ」を例に語った。



▲興味深く講義を聴く

講義の後には在学生の引率で、130年記念館(生田10号館)などを見学した。

浅見・教育開発支援委員会委員長

荏田高校で講演

神奈川県立荏田高校で、教育開発支援委員会委員長の浅見和彦経済学部教授が本学におけるFD(ファカルティ・ディベロップメント)活動や、学生による授業評価について講演を行った=写真。高校側からの「進学を目指す高校生が身につけておくべき能力について」という質問に、浅見教授は「今の学生は勤勉だが、受け身の感がある。『社会全体』に興味をもたせる教育を高校で行っていただきたい」と応じた。



専大松戸高1年生 生田キャンパス見学

6月9日、専修大学松戸高等学校の1年生を対象とした「日高義博学長講演会・生田キャンパス見学会」が開かれた。

日高学長は講演で「正しい人間の価値観を学び、自分の可能性を見つけ出してほしい」と語った＝写真。



ベンチャー「入門講座」「ワークショップ」開催

起業への道、経営者らが体験談

キャリアデザインセンター主催のベンチャー入門講座(全6回)と、同ワークショップ(全5回)が生田キャンパスで開催された。毎回約400人の学生が活躍する経営者の体験談を聞いた。

6月21日のベンチャーワークショップの講師は、(株)プリマプロジェクト代表取締役社長の木暮康雄さん(平19経営)。木暮さんは在学中、中古コミックをシリーズで一式ネット販売する「全巻読破.com」をスタートした。



▲多くの学生が受講「ベンチャーワークショップ」(壇上は木暮さん)

医者の一息子として育ったが、好奇心から「ホスト」の道へ。横浜でナンバーワンとなり店の支配人に。そこで“裏社会”の厳しさを知り、経営学を学ぼうと専大に入学。恩師の教えや仲間との出会いが「起業」につながった……と語った。「『いつかやる』と言う人間は結局実行しない」「意味も分からず行動するな」「迷った時はつらい方を選択せよ」とキーワードが次々飛び出した。



▲講演する岸さん

7月5日の講師は竹中平蔵元総務大臣の秘書官として活躍した岸博幸・慶應大学准教授。翌6日にはベンチャー入門講座の最終講座が行われ、セブンスーズホールディングス(株)代表取締役会長兼社長の恩田英久さん(平4法)が講演した。

「ベンチャービジネスコンテスト」のビジネスプランを募集中(10/9締切り)。詳細はキャリアデザインセンターで。

※キャリアデザインセンターが川崎市と連携した「課題解決型インターンシップ」研究成果発表会が開かれる。見学希望者は直接教室へ。



▲ワークショップでも講演した恩田さん

▼7月30日「納豆の商品・マーケティング戦略」=発表ゼミ▽商・石川和男ゼミ▽経営・池本正純ゼミ
 ▼同31日「和菓子掛け紙デザイン提案」=発表ゼミ▽文・板坂則子ゼミ▽商・生田目崇ゼミ▽商・石川ゼミ▽経営・田口冬樹ゼミ。いずれも16時20分から、生田10号館10302号教室で。

社会学専攻1年次生の合宿セミナー

実地調査→発表 インタビューに苦労

文学部人文学科社会学専攻の1年次生全員が実地調査をする「フレッシュマンセミナー」が5月12、13の両日、行われた。“現場”を踏むフィールドワークの大切さと調査・分析・発表という一連の作業を通して社会学の学び方を知る「入門合宿」で、新入生を迎え毎年、実施されている。

参加の1年次生96人が所属の基礎ゼミ8グループに分かれ、初日は、川崎、小田原などそれぞれの目的地に散り、テーマに沿って実地調査。同夜は伊勢原セミナーハウスでレポートにまとめ、2日目の発表会に備えた。

広田康生ゼミは「横浜の都市イメージについて—横浜らしさとは？」がテーマ。みなとみらい、馬車道、中華街の各観光スポットで「横浜はどんな街？」と人々にインタビュー。横浜には異質なものが同時に存在し、住む人たちの愛着が街づくりをしていると発表した。

「箱根の歴史と観光の現状」を発表した樋口博美ゼミは、観光客でごった返す箱根湯本商店街の20店に“突撃インタビュー”。店の売り物、客層、モットーなどを聞き、歴史と密接にかかわる箱根独特のものづくりや商売の展開、人々の暮らしを明らかにし、日本有数の温泉地の展望を探った。

発表会は、パワーポイントを使うグループから模造紙に書き込むグループまで手法はさまざま。地図や写真などの資料を活用し、事前準備してきたグループもあった。

教員からは「熱意が伝わるものが多かった。問題設定を明確にし、ポイントを伝えるための工夫が今後の課題」(秋吉美都准教授)との声があった。

参加学生の共通した苦労はインタビュー作業。最初「どうやって声をかけていいかわからない」と戸惑っていた宇都ゼミ生は、仲間と協力し合い100人のインタビューをこなした。「調査作業は甘くないと実感したが、受けてくれる人の温かさを感じた」や「社会学の楽しみが分かった」などの声も聞かれた。

馬場純子准教授は「合宿は社会学的『もの』の見方を養う絶好のチャンス。共同作業を通じ学生のコミュニケーションも深まった」と話している。

ほかの基礎ゼミの発表テーマ＝▽嶋根克己ゼミ「日吉台地下壕から太平洋戦争を考える」▽馬場純子ゼミ「川崎フロンターレ地域密着型の現状を探る」▽宇都榮子ゼミ「横浜—元町とみなとみらいを歩いて—」▽今野裕昭ゼミ「川崎・移りゆく繁華街」▽大矢根淳ゼミ「小田原で『かまぼこ』『お城』以外を見つける」▽川上周三ゼミ「中華街の文化、経済、地域の統合」



▲パワーポイントで発表するグループも(発表は大矢根ゼミ)



▲インタビューする学生(横浜で=宇都ゼミ)